

チャの短期育苗のための挿し木時期

～茶生産の繁忙期を避けた盆明け以降の無かん水挿し木生産が可能に～

8月中旬に密閉挿しを行うと、8月下旬以降の挿し木と比較して、得られた苗は根数が多く、生存率が91.7%でした。翌年にその苗を定植すると、生存した株の伸長は良好でしたが、猛暑の影響で秋期以降枯死する株も見られました。

1. 背景と目的

奈良県内で使用されている2年生の苗は生産者が減っており、自家増殖による挿し木を行う必要が生じています。挿し木は、6月中旬～7月初旬に行うのが一般的ですが、この時期は茶生産者が通常の肥培管理と茶の摘採・製造で多忙のため、挿し木を実施することは困難です。しかも苗の育成は最長2年を要し、その間の管理にも手間がかかります。

そこで、茶生産者の繁忙期を避けた盆明け以降、半年程度で苗が得られ、かん水などの必要がない密閉挿しによる苗木の自家増殖方法を開発しました。

2. 研究成果の概要

2022年8月15日（以下、8月中旬区）、8月25日（8月下旬区）、9月5日（9月上旬区）、9月15日（9月中旬区）、9月26日（9月下旬区）に大和茶研究センター内のチャ‘やぶきた’から採穂した挿し穂を用い、真砂土の挿し木床に挿し木しました。挿し木床より高さ40～50cmのトンネルを作り、透明フィルムで挿し木床を密

閉し、その外側にダイオラッセル75PAを20～30cm程度空けて被覆しました。

2023年4月の株の生存率は全区で86%以上となりました。根数は挿し木時期が早い8月中旬と8月下旬区がそれぞれ20.4本、16.8本と他区に比べ多くなりました。根長も挿し木時期が早いと長くなりました。9月下旬区は根が発生しませんでした（図1）。

8月中旬～9月上旬に挿し木した苗は、調査後にセンター内ほ場に定植しました。

定植後の調査では、新梢長について6月時点では挿し木が早いほど伸長がよくなりましたが、7月以降は差がなくなりました。生存率は夏の猛暑の影響により全区で9月以降に枯死する株が見られるようになり、特に8月下旬および9月上旬区で下がる傾向が見られました。

3. 実用化に向けた対応

これらの結果をふまえ、育苗期間中の発根量をさらに増やすため、培養土の検討を進めています。

（大和茶研究センター 脇坂 勝）

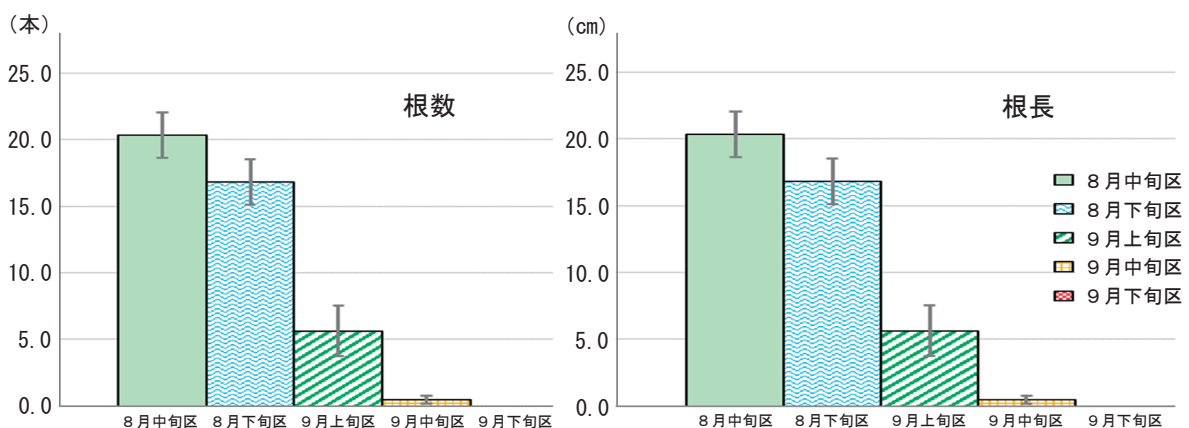


図1 挿し木時期の違いが根数および根長に及ぼす影響
垂直棒は標準誤差を示す (n= 3)

※登録品種の自家育苗は、種苗法で育成者権者の許諾の必要があります。